

Top Message

夢を提示し、技術をつなぐ

「カワる、サキへ。」を
示してくれた
大阪・関西万博への挑戦代表取締役
社長執行役員 最高経営責任者

橋本 康彦

技術を重ね合わせ、ワクワクするような未来を描く

「川崎重工の技術を重ね、未来を見せてほしい——」。今回の大阪・関西万博において私が言ったのはこの一言です。そして展示を見た瞬間、「これはいい、自分も欲しいな」と社長という立場を抜きにして感動しました。「移動本能」というワクワクするようなテーマから未来を描き、当社全体の技術をカバーする素晴らしい提案だったと思います。チームメンバーや関わってくれた方たちを大変誇らしく思いますし、私たちにできることがまだまだたくさんあると気づかせていただきました。

社長就任以来、求め続けてきた二つの視点

2020年に社長に就任して以来、私が求めてきたことは大きく二つあります。

一つ目は、技術のシナジーです。当時はコングロマリットディスカウントという言葉をよく耳にしましたが、たくさん事業があってもそれぞれが独立しては一緒に

いる価値がない。だからこそグループビジョンではシナジーが発揮できる3つの領域を定義し、当社のさまざまな技術を掛け合わせることを大事にしてきました。「こういう未来をつくろう」という目標があって、はじめてそれぞれの技術が活かされ、みんなが一つになるからです。

二つ目は、社会課題を起点にしたマーケットインの視点です。例えば「将来、ロボットに介護をさせましょう」という話をする、多くの人が「絶対に欲しい」と言ってくれます。これまでは「今の技術だとここまでならできます」という出し方になりがちでしたが、「こういう未来を一緒に作りませんか？」とその先を提案することができれば、自分もやりたい、ぜひ応援したいという仲間が集まってくるはずだからです。

Kawasakiの新たなDNAを脈々とつないでいきたい

今回の展示「CORLEO」と「ALICE SYSTEM」は、まさにいま当社が目指している、カンパニーの壁を越えて技術のシナジーを発揮し、社会課題に応えながら未来

をつくっていくということを体現してくれました。

CORLEOは、登山家にしか行けないようなところにもチャレンジできるモビリティですが、これをつくるにはオフロードのセンスがいるし、ロボットはもちろん駆動源には水素の技術も必要です。当社の取り組みが全部入っていて、本当に満点ですね。さらに「これに乗りたいたい」と思わせるデザインにこだわり抜いたことも良かった。デザインにはエモーションに訴える力がありますから、機能優先ではなく、形そのものに思いをのせることができたのは、当社の今後に大きなメッセージをくれたと思っています。

ALICE SYSTEMは、移動したくてもできない方たちに焦点を当てた未来の公共交通システムです。年をとってもいろいろなところに行きたいし、美味しいものや新たなものに出会いたい。そういう人々の願いを叶えるために、陸海空の技術を重ね合わせた形でお見せすることができました。実はいろいろな政治家の方もご覧になっていて、あれを早く社会実装してほしいという言葉もいただいています。

また会場では、「CORLEO って結構大きくてかっこいいね」「ALICE SYSTEMはファーストクラスみたい、アームが動いて楽しい」という声も聞けました。これはワクワクするような仕掛けや快適さまで開発の軸に入れ、そこに価値があると主張してくれたチームメンバーのおかげです。当社にとって大事な軸がひとつ増えたと思います。

技術にとらわれず未来を想像し、人々が求めていることに「こんなアンサーもあります」と提示する。「これできないかな」と問いを立て、足りない技術を補いながら新しいものをつくり出す。以前、コロナ禍において、社内から「この時代の役に立ちたい」という人が手を挙げ、PCRのことは知らなくてもゼロから「自動PCR検査ロボットシステム」を立ち上げてくれましたが、今回の万博はこの精神をさらに広げてくれましたし、私はこれをDNAとして脈々と大事にしていきたいと思っています。

万博の役割は、未来に対して夢を見せること

私は1970年の万博を体験し、エンジニアになりたいと思った一人です。当時は腕時計でテレビが見られたり、通話ができたりする展示が人気でしたが、子どもの頃から鉄人28号や鉄腕アトム、スーパージェッターが大好き

だった私は、心からワクワクしたのを覚えています。ロボットと暮らせる未来がきたら素晴らしいし、絶対に自分も鉄腕アトムをつくりたい。だからエンジニアを志しましたし、今でもずっと抱き続けている思いです。

万博の役割というのは、未来に対して夢を見せることだと思うんです。「え、こんなことができるの?」「自分もやってみたい」と感じた子どもたちが、私のようにエンジニアになり、将来もしかしたら当社に加わって、「あの時に見た未来を一緒につくりたい」と思ってくれるかもしれない。だからこそこういう機会に夢物語を描き、いろいろな思いや技術と出会い、世代をつないで新しいものを生み出していくことを目指していきたいですし、これを続けていけば当社は大きな可能性があると信じています。

大阪・関西万博のそのサキへ

今回の提案は、万博だけでは終わりません。社会のためにも、当社のためにも、あるいは関わったそれぞれの人たちの自己実現のためにも、ものにできるまで続けていきたい。実は「2050年じゃ遅すぎる」「早くつくってほしい」と言われていまして、そういうマーケットの声に応えるためにも、途中経過でも良いのでどんどん世の中に発信しながら商品化していくプロセスを考える必要があると思っています。

夢のようなものをつくろうとする時、もちろん当社の技術だけではできません。実際にKAWARUBAではさまざまな技術を持った企業が集まり、同じ目標に向かって新たな価値の創出に挑戦しています。ただ、その前に、当社の中にも「やりたい」という強い思いを持った人たちがたくさんいます。まずはそういう人たちに手を挙げてもらい、夢の実現まで関わり続けられるような仕掛けをつくっていくことが重要ですし、それが経営陣の大きな役割だと感じています。

いま自分がつくっている商品、持っている技術にこだわらず、世の中のさまざまな可能性に目を向け続けていく。そうすれば今回の万博のように、私たちはこれからも新たなものを生み出し続けていけるのではないのでしょうか。